



東北支部年報

第 43 号

〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉 1-5-15

日本生命仙台勾当台南ビル 4F

TEL 022-265-3404

FAX 022-265-3405

E-mail: aij-tohoku@nth.biglobe.ne.jp

巻頭言

多様さの向こうに

東北支部長 速水 清孝

このところなぜかたびたび、私たちの学会・日本建築学会の深さと多様さに驚かされています。

学会ですから深さは当然でしょうが、多様さは、建築の「学術・技術・芸術の進歩と発達」を掲げる広さによるものでしょうか。顧みるに、この多様さゆえに学会は貴重な場であり、それは学会のしなやかな強さにつながっていると感じてきました。その一方で多様さは、それゆえに難しさも孕んでいると思うのです。

周知のように、近年の日本列島は様々な災害に見舞われています。東北地方も東日本大震災（2011）はもちろん、その余震や水害などがあり、言い方は憚られますが、災害の先進地域であるかのようです。とりわけ2年続いた福島県沖地震の調査報告会では、長い時間を経た建物を巡って分野による温度差が浮き彫りになりました。登壇者を東北支部の中に限り、多分野で膝を詰めて議論したからでしょうか。そうした温度差が表面化したことに意義を感じ、多様さの賜物との思いを強くしました。

その半面、残念な印象も持ちました。温暖化など私たちが直面する問題を思えば、長寿命化はじめ時間を踏まえた建築のありようを、分野の垣根を払って考えることが不可欠なはずです。にもかかわらず、地球規模の待ったなしの問題を前にしてもなお、従来のままの、分野の殻に籠った持論が披露されたように感じたのでした。多様さが仇にな

ったと言うべきでしょうか。多様であっても、タコツボの集まりでは困ります。

折しも関東大震災(1923)から100年の節目となる今年、本部ではこれに関連した催しが企画されています。「東北支部はその先を見据えたい」。そう思っている中、支部ではいくつかの分野横断的、学際的、あるいは産官学の枠を超えたシンポジウムや、今まさに進むみちのくの風の企画などに、残念さの超克に向けたと思しき試みがチラホラ。どうやら、思っていたのは私だけではなかったようです。

こうした形で議論を重ねることで、広い建築の世界が、多様さを保ちつつ、相互の理解の下に同じ目標に向かって融合が果たされていくのではないかと。そしてできれば、こういった試みの向こうに、東北支部という小さな集まりで得た知見が、「東北モデル」とでも呼べるものとなって、日本全体を牽引して行って欲しい。因らざるも災害の先進地域となった東北がその役を担えたら素晴らしい。いずれ振り返って、「そのための一歩をここで踏んだ」と思っていただけなら、災い転じて福となしたことになるのでしょうか。

さて、今年のみちのくの風も昨年同様オンラインでの開催となります。社会は対面に戻りつつありますが、関係者一同で真摯に議論した末の最善の選択と考えています。多くのご参加をお待ちしております。最後に、東北支部会員の皆様の、益々のご健勝をお祈りして巻頭言と致します。

もくじ

□巻頭言	1
□企画記事	2
□2022年度司法支援建築会議東北支部活動報告	7
□2022年度日本建築学会東北支部研究補助報告	7
□第43回東北建築賞(作品賞)選考報告	7
□第32回東北建築作品発表会報告	10
□日本建築学会「作品選集2023」東北支部選考経過報告	11
□2022年度日本建築学会設計競技東北支部審査報告	11
□2022年度第85回東北支部研究報告会報告	12

□2022年度第8回東北支部建築デザイン発表会選考報告	12
□2022年度日本建築学会東北支部総会報告	13
□研究部会活動報告	14
□支所だより	17
□支部役員会から	19
□支部役員名簿	21
□2022年度事業報告	22
□2023年度事業計画(案)	24
□法人・賛助会員名簿	26

(1) みちのくの風 2022 秋田開催報告

前常議員 菅野 秀人

令和4年度のみちのくの風2022秋田は、昨年度に引き続きオンライン形式で開催した。二日間の日程で、1日目は特別企画事業（参加者約60名）、2日目は研究発表会とデザイン発表会（参加者約200名）を実施した。特別企画事業として、「2022年3月16日の福島県沖の地震に関する災害調査報告」を東北支部災害委員会が中心となって企画し、5つの調査WGによる調査概要報告と総合討論が実施された。さらに田辺新一会長による基調講演「カーボンニュートラル実現のための建築分野の役割」、そして今年6月に竣工した「あきた芸術劇場ミルハス」の現地ツアーの生中継を主体とするオンライン見学会を実施した。オンライン見学会は、オンラインでの参加者にも参加意識が高められるような演出を目指して実施した。

開催日：2022年6月18日（土）、19日（日）

1) 第85回支部研究報告会

日時：2023年6月19日（日）

会場：オンライン（Zoom）

発表題数：73題／参加者：188名

2) 第8回建築デザイン発表会

日時：2023年6月19日（日）

会場：オンライン（Zoom）

発表題数：5題／参加者：19名

3) 特別企画事業

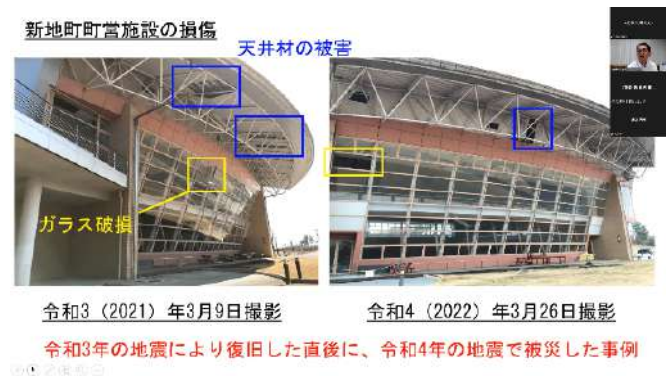
特別企画①「令和4(2022)年3月16日福島県沖の地震 災害調査報告会」

2021年2月13日に発生した福島県沖の地震（M7.3）の発生からわずか1年後、2022年3月16日に、福島県沖の地震（M7.4）が発生した。福島県や宮城県において被害が発生したため、本部災害委員会との連携に基づき、東北支部内に調査WGを立ち上げた。みちのくの風2022秋田の特別事業として、各調査WGによる調査結果の報告会をオンラインで開催した。

趣旨説明の後、設置された以下の5つの調査WGから調査結果の概要が報告された。WG1【地震・地震動】汐満将史（山形大学）／WG2【建物】浅里和茂（日本大学）／WG3【設備】長谷川兼一（秋田県立大学）／WG4【生活関連】小地沢将之（宮城大学）／WG5【歴史的建造物】中村琢巳（東北工業大学）

続いて、質疑応答および総合討論が行われ、歴史的建造物として守るべき価値の要素としてのオーセンティシティと、同じ被害を繰り返さないための現代的な地震対策とが

常にせめぎ合っていることなど、活発な議論が展開された。また、福島県内におけるマンション玄関ドアの開閉に支障が生じるような被害状況について、1978年6月12日宮城県沖地震の教訓が生かされていないとする源栄正人東北大学名誉教授による指摘や、吉野博東北大学名誉教授からは、大規模太陽光発電施設（メガソーラー）の地震被害、および火力発電等による電力供給量の低下に対する再生可能エネルギーによる電力の補填または代替性等に関する問題提起も行われた。



最後に、2022年度日本建築学会大会（北海道）の災害部門—緊急報告会として、「令和4（2022）年3月16日福島県沖の地震—災害調査報告会」が、9月8日（木）9:00～11:30に、オンラインで開催されるアナウンスがあった。

[佐藤 健／東北大学]

特別企画②基調講演会「カーボンニュートラル実現のための建築分野の役割」

講師：田辺新一会長

カーボンニュートラルへの動きとして、地球環境問題と建築の関係、IPCCとCOP21、COP26の目標、2050年脱炭素社会の実現、建築物省エネ法、ZEB・ZEH、材料・資材のEmbodied Carbonをキーワードに、具体的な事例やデータを元に80分にわたりご講演いただいた。

カーボンニュートラルは単なる環境対策ではなく産業・社会構造の変革であり、建築分野に照らせば、環境分野だけでなく、材料・施工分野、構造分野、都市計画・建築計画分野などあらゆる分野における取組みが求められている。

[菅野秀人／秋田県立大学]

特別企画③「あきた芸術劇場ミルハス オンライン見学会」

あきた芸術劇場ミルハスは秋田県と秋田市が相互連携し、「地域の文化力を高め、文化の力で地域を元気にする」ために、文化芸術の創造拠点となる新たな劇場を再生させるプロジェクトとして建設された施設である。令和4年9月23日のグランドオープンに先駆けて、今回の特別企画としてミルハスの魅力を探るべく、現地中継による双方向性を確保したオンライン見学会を実施した。見学会の実施方法として、匿名かつリアルタイムで質問が可能な双方向コミュニケーションツールを活用して、現地参加者と同様に現地さながらの雰囲気をオンライン参加者に体験してもらえよう、見学中に適宜、質問を受け付けた。見学会の冒頭に、ミルハスの設計・工事監理を担当した佐藤総合計画・小畑設計共同企業体の境静也氏から設計概要とコンセプトを紹介いただいた。現地からは同設計共同企業体の多々良邦弘氏らによる引率のもと、現地参加者を交えながらの施設紹介に加え、見学中に受け付けた質問に対して現地から説明いただいた。ミルハスの特徴であるホール廻りの全てのホワイエをロビーとして開放できる「パークホワイエ」や、ホールを浮かせて実現したロビー空間「秋田小路」など、豊かなパブリックスペースの空間構成と共に、ホールの壁面や外観、内観の仕上げなどに秋田杉をふんだんに使用し、樺細工や川連漆器、大館曲げわっぱなどの伝統工芸品が随所にちりばめられており、秋田の魅力創出についても紹介いただいた。質問内容は、多岐にわたる質問が寄せられ、劇場の音響や構造、舞台裏の設計計画などに関する質問以外に、寒地建築物としての風土・気候への配慮事項については地元設計共同企業体の齊藤巧氏から説明いただいた。最後に、オンライン見学会後にも現地で質疑応答が行われ、オンライン見学中と同様に、多くの質問が寄せられ活発な議論が展開された。

[竹内仁哉／秋田県立大学]



本年度も昨年度に引き続きオンライン形式で開催となり、オンラインでの研究発表会の運営スキルを向上させ、またオンラインを活用した新しい特別事業の可能性も見出すことができた。東北支部は低密度な地域に拠点が分散している特徴を鑑みて、必ずしも対面のみならずオンラインを積極的に活用する方向性も見出された大会であった。一方で研究者同士の交流の観点から対面形式を望む声も多く聞かれ、これからの「みちのく風」の意義を改めて考える大会でもあった。

最後に大会の企画・準備・運営・実施にご協力いただいた関係諸氏に、この場を借りて御礼申し上げる。

[菅野秀人／秋田県立大学]

(2) 災害委員会市民企画報告 東日本大震災復興シンポジウム「みやぎ ボイス 2022～災害が日常になった今～」

櫻井 一弥

○企画概要

名称：東日本大震災復興シンポジウム「みやぎボイス 2022～災害が日常になった今～」

開催日：2022年7月2日（土）11：00～18：30

会場：せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア + Zoom 会議

対象：一般市民、東日本大震災の復興に関わる地域住民、行政担当者、大学関係者等

参加者：253名（うち、151名はZoomによるオンライン参加）

○背景・目的

「みやぎボイス」は、年に1回、東日本大震災からの復興に関わる様々な立場の方々が一堂に会して議論することで、震災復興の現在を確認し、地域の課題を共有する場として機能してきた。今回の「みやぎボイス」では、「災害が日常になった今」をテーマに議論を進めた。毎年のように起きる様々な自然災害に対し、東日本大震災での経験や教



訓を如何に活かせるのかについて、複数の視点から議論した。

○内容と成果

例年「ラウンドテーブル」という議論形式により、登壇者も聴衆も一体となった課題の共有と気づきを与える場として実施してきたが、今回は前二回に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、遠隔地から参加する登壇者と一般参加者については、オンライン会議ツール zoom を用いたリモート参加とした。登壇者は現地とリモート併用、一般参加者の現地受け入れは無しとし、事前登録制の完全リモートとした。

前半3テーブル、後半3テーブルの合計6つのテーブルにおいて、広くて深い議論が展開された。

前回の実績があったために、リモートとはいえ話し手と聞き手の住み分けが明確になり、大変聞き取りやすい環境を実現することができた。リアルとリモートを併用して復興とまちづくりに精力的に関わられている各分野の方々に参集いただき、多様な意見交換と示唆に富む知見の共有ができた。

当日は複数の新聞社の取材と後日の報道があった。

(3) 2022 年度「親と子の都市と建築講座」 ～リモート「スマハキット」でスマート ハウスの実力を体感しよう～

菅原 正則

日時：2022年8月29日、18:00～19:30

開催方法：オンライン（Zoom）

講師：菅原正則（宮城教育大学 教授）

長谷川兼一（秋田県立大学 教授）

西川竜二（秋田大学 准教授）

司会：長谷川兼一（前出）

参加者：2名（小学生4年生および6年生）

趣旨（案内チラシより）：

これまで身近に使われてきたモノに、センサーやデータ通信・処理の技術を加えて「スマートに（賢く）」すると、便利で無駄のない動きをするようになります。「スマートハウス」は、主に電気エネルギーを無駄なく使用するしくみを持ち、自然エネルギー利用に役立ちます。それは地球環境を守るだけでなく、災害などでライフラインが途切れても生活を支える役割を果たします。この講座では、このような住まいをスマートにする意味について学び、その初歩的なしくみを電子部品のキットで確かめます。

内容：

本講座は、秋田県立大学システム科学技術学部 創造工房委員会の主催による第15回夏休み科学教室「創造学習」／

「おうちで創造学習」への出展という形態で実施された。新型コロナウイルス感染対策のため、11講座が対面、5講座がオンライン（Zoom）で8月1日に開催される予定であった。しかし、その10日ほど前に、コロナ感染拡大の状況を鑑みて、主催者の判断により開催延期となった。本講座は当初、対面での実施に向けて準備してきたが、開催日を変更し、実施形態もオンラインに切り替えた。参加者数が少なかったのは、オンラインという実施形態にただでなく、新たに設定された開催日が夏休み終了後の平日夕方であったためと考えられる。日程変更前の参加申し込み数は35名ほどであった。

(1) 開会

講座の開催趣旨や注意事項が説明された。

(2) スマートハウスとは何か？

ここでは、スマートハウスが1980年代のアメリカにおいて構想された経緯や、現代の自然エネルギー利用のために普及する意義、そして HEMS を中心とした仕組みについて説明した。「スマハキット」はスマートハウスの仕組みを安価な電子回路で簡易に再現した建物模型教材であるが、そのオンライン版であるリモート「スマハキット」を使用すること、そしてそれは宮城教育大学に設置され、ほかの講師がそれぞれの大学に居る体制で、ネットワークでつながれることにより講座が開催されていることを最後に説明した。

(3) リモート「スマハキット」の使い方

「スマハキット」は、LED と Cds 照度センサーを組み込んだ建物模型、センサーボード（ちっちゃいものくらぶ NanoBoard AG）、ノートパソコンで構成されている。LED への電源はリレー回路を通じて供給され、Scratch の自作プログラム（ON/OFF モード、手動可変モード、HEMS モードの切り替えと、計測機能を持つ）により出力制御が行われる。コンデンサによる蓄電回路を加えることもできる。参加者は、Zoom の「リモート制御」機能を用いて、リモートで「スマハキット」を使用できる。自分が操作した結果については、Scratch の画面上で測定値がモニターできるだけでなく、写真1のように Web カメラで模型内の照明が光る様子で確認できる。

これらの説明を簡潔に行い、次の段階「(4) スマートハウスの実力を体感しよう」において、実際に操作しながら、使い方を覚えてもらうことにした。



写真1 リモート「スマハキット」の使い方を説明している様子 (写真中央の模型内が光っている)

(4) スマートハウスの実力を実感しよう

電源と LED 制御の組み合わせについて、①安定電源+ON/OFF、②安定電源+手動可変、③変動電源 (太陽光発電・コンデンサなし) +手動可変、④変動電源 (太陽光発電・コンデンサ付き) +手動可変、⑤変動電源 (太陽光発電・コンデンサ付き)+HEMS、の5条件について実験を行った。参加者が2名だったので、①～⑤のそれぞれで、1人ずつ実験をしてもらい、専用の記録用紙に結果を記録させた。

③～⑤の変動電源では、写真2のように、秋田市で観測された夏至ごろの2日間における日照時間データを用いて、発電量が変動するようにしてある。これに対して目標から過不足なく明るさを調節してもらうよう、参加者に趣旨を説明した。参加者は1分チャレンジ (1分間でどれだけ目標の明るさに調整できるかを競う) の結果を比較することにより、蓄電 (コンデンサ) やHEMS を用いた際の効果を体感した。



写真2 「(4) スマートハウスの実力を実感しよう」の画面

(5) スマートハウスに挑戦!

ここでは写真3のように、スマートハウス (HEMS モードの建物模型) と同時に参加者 (チャレンジャー) が建物模型を操作して、リアルタイムで結果を比較できるようにした。そして、④変動電源 (太陽光発電・コンデンサ付き) +手動可変、の組み合わせにおいて安定的に目標の明るさにできるか、スマートハウスに挑戦してもらった。



写真3 「(5) スマートハウスに挑戦!」の画面

(6) まとめと閉会

講座の講評と、参加への感謝を述べて終了した。今年度は、対面を想定して準備していたところ急遽オンラインに変更となったが、昨年までの蓄積を生かして順調に実施できた。参加者もオンラインに慣れている様子で、楽しんでもらえたと考えている。

(菅原正則、長谷川兼一、西川竜二)

(4) 2022年度「親と子の都市と建築講座」 ～親子で学ぼう やさしい建築構造力学 講座～活動報告 (福島会場)

福島支所長 渡邊 佳文

1. 開催趣旨

小・中学生を対象とした建築構造に関するワークショップを通し、建築を楽しく知ってもらい、建築への興味の醸成を図ることを目的とした。

2. 開催概要

日時: 令和4年8月21日 (日) 13:30～16:30

場所: 福島県教育会館

講師: 福島県土木部建築住宅課 山下 竜一

参加者: 中学生親子等6名 (3チーム)

3. 建築講座

(1) 座学

やさしい建築構造力学として、建築構造の基礎について座学を行った。始めに、最も身近な建築物である住宅をモデルとした軸組模型やイラストを使用し、柱や梁といった建築構造や、筋交いなどの耐震構造について説明があった。次に、ワークショップに向け、梁に使用される材料や断面形状、横座屈や局部座屈、同じ量の材料で強い梁を作るにはどうすれば良いかなど、どのような形が強いかなど講師がクイズにし、イラストなどで分かりやすい説明があった。また、アーチ、ラーメン、トラスなど様々な梁の種類や特徴を写真で紹介し、参加者は建築構造を身近に感じながら学

んでいた。



軸組模型により耐震構造を説明

(2) ワークショップ

座学後、一枚のボール紙で70cm離れた台に架ける「梁」を製作し、吊り下げられるおもりの重さを競った。スタッフからルールの説明を受けた後、参加者は3チームに別れ、製作する梁の形や作業手順を話し合った。各チーム協力しながら検討・設計・製作を進め、3チーム全てが時間内に工夫を凝らした個性のかつ素晴らしい梁を完成することができた。



ワークショップの様子

(3) 計測

計測前に、製作した梁がどのくらいの重さに耐えられるか、予想重量と工夫した点を各チームが説明した。計測では最初のチームから過去最高記録を更新する結果となった。梁の変形が進み、多くの参加者が「もう壊れるだろう」と予想した場面では、増え続けるおもりに耐える梁に対し、拍手が起こるなど大きな盛り上がりを見せた。



計測の様子

(4) 表彰・講評

事務局から結果を発表し、講師からの講評とともに各チーム一人一人に成績をたたえた賞状が授与された。

4. おわりに

座学で学んだことをワークショップに生かすなど、本講座の目的である建築構造を楽しく学び、実践し、体感することができた。また、今回の優勝者は初参加ながら最高記録を樹立し、他チームからは賞賛の声とともに、悔しがめる声も聞かれた。

本企画も今年度で4回目の開催となり、複数回参加いただいているチームもいるため、今後は参加者が毎年楽しく学んでいただけるよう様々な企画に挑戦していきたい。

最後に、本講座の開催に当たり、御協力いただいた関係団体及び関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



賞状授与



全員で記念撮影

2022年度司法支援建築会議東北支部活動報告

運営委員長 吉野 博（東北大学名誉教授）

司法支援建築会議の東北支部は2019年4月1日に設立された。その年の5月11日に東北支部発足記念講演会を開催し、その後、少なくとも毎年、支部総会の際に講演会を実施することとした。また、運営委員会を適宜、開催し司法支援に関する情報交換を行っている。

1. 講演会の開催

2022年5月14日に、リモート形式で、「日本建築学会司法支援建築会議東北支部 第2回講演会」を開催し、「近年の建築紛争の実情等について」と題して、仙台地方裁判所判事、第2民事部齊藤充洋裁判長より講演をいただいた。

講演では、建築関係訴訟には、①瑕疵（契約不適合）の有無、②追加変更工事、③建築工事の出来高、の三つの問題があり、どの型においても「工事契約の内容を示す設計図書、見積書、注文書等」の早期の提出が重要であること、建築関係訴訟の特徴としては、①審理及び判断に専門的技術的知見を要する、②争点が多数となる、③客観的な証拠が少なく事実認定が困難、④当事者間の感情的な対立が激しい、⑤審理が長期化する、があること、最近の特徴としては、①不法行為に基づく損害賠償請求、②構造計算上の瑕疵に関する新しい問題があることなど、貴重なお話を頂いた。

2. 運営委員会

運営委員会は本年度2回開催した。第11回（2022年11月9日）では、①鑑定料の見積の仕方について、②名誉司法会員と功労者の推薦について、③来年度の支部総会時の講演会の企画、について議論された。

第12回（2023年3月15日）では、第22回司法支援建築会議講演会「自然災害を巡る建築紛争の予防と対策」（12/9開催）について報告があり、家屋の浸水被害の防除法や被害後の対策などについて意見交換した。また、2023年名誉司法会員・功労者表彰についての報告があった。次に、支部総会時における講演会の企画について議論され、講演（仮題）「建築と地震と建築基準法」の内容について意見交換した。

2022年度支部研究補助費活動報告

「建築環境・設備分野におけるBIM関連技術の動向に関する調査研究」

環境工学部会
部会長 長谷川 兼一

建築・都市の企画・設計から施工、維持・運用にあたって、関連する膨大なデータを管理し、ステークホルダーが容易に情報にアクセスできるようにすることのニーズが高まっている。環境・設備分野においても、例えば、建築内外の環境要素をシミュレートして、建築・都市の空間とし

てあるべき環境が形成できるようにデザインするプロセスを経ることが可能となりつつある。また、建築設備のBIM技術の発展も著しく、設計・施工の精度向上を確実にするのみならず、建築他分野との協働や建築ライフサイクル評価、カーボンニュートラル実現を推し進めるツールになると期待される。

本研究では、BIM関連のデジタル技術を建築設計・施工に活用している大手ゼネコン2社、アプリケーション開発を行っているベンダー企業3社から最新情報の提供を受け、部会内で共有した。環境工学部会では数年来、共通テーマの一つとしてBIM関連技術の活用や整備に関する課題に取り組んでおり、今後の活動に資する情報を得ること意図し、現況の理解を深めることができた。

BIMの利用者としての大手ゼネコン設計部からは、設計・施工段階における各種シミュレーション活用から運用段階における建物デジタルツイン構築BIM活用の取り組みについての情報提供により最新動向を理解した。また、実際の建築プロジェクトにおけるBIMとCD(コンピュータシミュレーション・デザイン)の活用事例を通じて、これからの建築環境デザインの可能性や広がりにも触れることができた。CAD・BIMアプリケーションを始め建設DXのプラットフォームの開発を手がけているベンダー企業からは、国内のBIM関連技術の標準化の動向や、設計者・施工者の活用事例が紹介され、設計プロセスにおける単なる干渉チェックに留まらない建築設備分野におけるBIM技術の最新動向を把握した。また、最近ではBIM化されたデータを気流解析用の情報に変換する技術を介したシミュレーションが可能となっており、実務の現場における環境デザインや大学での設計教育への適用事例が増えつつあることを認識した。環境工学部会では、本研究にて得られた情報等を踏まえて、BIMを活用した建築環境デザインや大学での設計教育への展開に関するシンポジウムの企画や、BIMの活用スキルの向上を狙ったセミナー等活動に繋げていく予定である。

第43回東北建築賞（作品賞）選考報告

選考委員長 増田 聡

1. 応募作品

・小規模建築物部門	9作品
・一般建築物部門	22作品
計	31作品

2. 選考経過

(1) 事前打ち合わせ会議

2022年9月16日（金）17:00～18:00
於 オンライン（Zoom）

選考委員長の選出、東北建築賞作品賞募集要項、選考委員会規則などを確認した上で、応募作品の数とその内訳を確認した。東北建築作品発表会の運営方法及び東北建築賞

作品賞の選考基準などについて事前打ち合わせを行った。

(2) 東北建築作品発表会

2022年10月8日(土) 10:00~16:02
於 オンライン (Zoom)

第32回東北建築作品発表会において応募された作品の発表が行われた。コロナ禍ということで昨年度に引き続きオンライン開催であったが、限られた発表時間の中でそれぞれのコンセプトが紹介され、発表会は全体として滞りなく進められ終了した。時間厳守にご協力いただいた発表者、諸氏に敬意を表したい。

(3) 第1次審査会

2022年10月8日(土) 16:30~18:00
於 オンライン (Zoom)

東北建築作品発表会終了後、現地審査を行う必要のある作品を選定することを目的として、第1次審査を行った。小規模建築物部門と一般建築物部門を別々に選考せず、まとめて投票することになった。

全作品の中から一人10票以内で投票することとなり、各委員の投票および発表内容を総合的に考慮した結果、小規模建築物部門3作品、一般建築物部門10作品、合計13作品を第1次審査通過とした。

次に、現地審査は1作品につき2名以上の選考委員がこれに当たることを確認し、選定された13作品について現地審査の分担を決め、現地において確認すべき点を検討し、施設管理者との連絡を含めた現地審査の日程調整は事務局を通して行うこととした。

なお、1次審査の落選者へは200字程度の講評を選考委員分担で作成し、選考委員会として送付することを確認した。

(4) 現地審査

現地審査については11月と12月に選考委員で分担して実施した。

(5) 第2次審査

2023年1月21日(土) 13:00~17:30
於 日本建築学会東北支部会議室

まず、増田委員長より全体の進め方と評価ポイントの確認があった。その後、1作品ずつ現地審査担当委員からパワーポイントにより報告した後、ほかに現地を確認した担当委員からも印象や評価すべき点を報告した。報告を受けて、それぞれの作品ごとに、審査の評価ポイント等についての討議を参加の委員全員で行った。すべての作品の紹介と討議が終わった後に、出席の全委員による投票を行った。投票に当たっては、応募数が例年並みに戻ったことを踏まえて投票数を決定した。また、特別賞は特筆すべき点がある作品と、佳作として評価できる作品を対象とすることを確認した。

投票の結果、作品賞は一般建築物部門から3作品、小規

模建築物部門から1作品の、合計4作品が選定された。特別賞については、小規模部門から1作品が選定された。

(6) 総評

今回の4つの作品賞受賞作は、立地する東北の地域環境や風土・文化を丁寧に読み解いた上で、公的施設としてそれぞれに求められる「児童遊戯、観光交流、生産販売、美術鑑賞創作」の活動そのものの位置づけやあり方にまで遡った検討を経た後に、建築計画・空間構成・構造設計の新しい提案や工夫を試みているという特徴があります。また、特別賞となった狭小敷地にたつ小規模住宅も、EVコアとスキップ状のフロア構成で二世帯居住でも閉塞感を感じさせない工夫に見どころがありました。今年は、小規模建築物部門から2作品が選ばれるなど、地域コミュニティとの関わりやヒューマンスケールの視点を意識した身近な作品に優れたものが目立った年といえそうです。

(7) 選考結果

「作品賞」4作品

小規模建築物部門

◆南三陸ワイナリー

【施主】南三陸ワイナリー株式会社

【所在地】宮城県本吉郡南三陸町志津川旭ヶ裏7-3

【設計監理】株式会社 irodori 一色 ヒロタカ

KATSU STUDIO 勝 邦義

【構造設計】Graph Studio 福島 佳浩

【設備設計】株式会社前田設備設計事務所 前田 康太

上玉利電気設備設計 上玉利 直也

【グラフィック】Grotesk 本間 亮

【施工】建築/有限会社山本セメント、ホソダア

ーキスタジオ

電気/有限会社イー・エム工業

衛生/株式会社小山設備

鉄骨工事/有限会社今野鉄鋼所

サイン/株式会社アベ美装、株式会社オオ

ウチ工芸 家具/一般社団法人南三陸YES

工房

資材提供/大和リース株式会社

一般建築物部門

◆八戸市美術館

【施主】八戸市

【所在地】青森県八戸市番町10-4

【設計】コンセプト/西澤徹夫+浅子佳英+森純平

建築/西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジ

オ(現・PRINT AND BUILD)設計共

同体

西澤徹夫 浅子佳英 森純平 宮武壮

太郎(元所員) 小泉立

構造/オーノ JAPAN 大野博史 藤本智

海老澤孝秀(元所員)

設備/森村設計 吉田崇 川口智之 水谷貴俊 三野誠

監理/西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ (現・PRINT AND BUILD) 設計共同体

西澤徹夫 浅子佳英 森純平 宮武壮太郎 (元所員) 小泉立原井喜雄 (石川設計)

橋本徳浩 (橋本設計) 大瀧英知 (総合設計研究所) 大石佳奈 (総合設計研究所)

サイン/ラボラトリーズ 加藤賢策 奥田奈保子 (元所員) 岸田紘之 (元所員)

カーテン/安東陽子デザイン 安東陽子 山口かすみ

照明アドバイザー/飯塚千恵里照明設計事務所 飯塚千恵里

音響アドバイザー/森純平 土倉律子

防災/安宅防災設計 鈴木貴良 白谷健太郎

積算/アーキ・ピーアンドシー 上木貴博

【施 工】 建築/鴻池組・田名部組・東復建設 特定建設工事共同企業体 佐藤正 熊田健二 佐々木浩貴 若林克明

電気設備/ユアテック・溝口電気 特定建設工事共同企業体 川戸良訓 上村洋一

機械設備/ダイダシ・サカモト・葵 特定建設工事共同企業体 城健二 野村大貴 春日光浩 平野喜代勝

外構/穂積建設工業株式会社 赤坂謙太

◆シェルターインクルーシブプレイス コパル (山形市南部児童遊戯施設)

【施 主】 山形市

【所在地】 山形県山形市大字片谷地 580-1

【設 計】 建築/大西麻貴、百田有希、池邊絢子、坂野雅樹

大西麻貴+百田有希/o+h

構造/平岩良之、國江悠介、藤本貴之 平岩構造計画

設備/阿部哲哉 Otias

サイン/原田祐馬、平川かな江 UMA / design farm

タイル/水野太史 水野製陶園ラボ

木製ベンチ等/カリモク家具

照明/有馬郁恵 大光電機 TACT 東京デザイン課

監理/大西麻貴、百田有希、池邊絢子、福田哲也、坂野雅樹

大西麻貴+百田有希/o+h

【施 工】 建築/大場菊雄、佐藤伸幸、井上勇太、蜂谷良

太 高木担当

村仁大、矢口清、茂木賢志 シェルター担当

高木・シェルター特定建設工事共同企業体

空調/村田潤司 Otias

衛生/安彦彰 Otias

電気/高橋慎吾 タカハシ電工

外構/富塚竜一、相原次順 石川建設産業

木構造体供給/佐藤公紀、佐藤和洋 シェルター

◆yodge

【施 主】 福島県玉川村

【所在地】 福島県玉川村四辻新田字村中 131

【設 計】 建築 SO&CO.: 担当/照内創 高橋賢泰 (元所員)

都市環境研究所: 担当/土橋悟

建築設計協力 檜垣幸志建築設計事務所: 担当/檜垣幸志

土木・ランドスケープ 都市環境研究所: 担当/土橋悟 平寄大地 稲葉美里

SO&CO.: 担当/照内創

土木設計協力 新和調査設計: 担当/湯澤洋一郎 石川幸司 七海隼人 高橋兼続

構造 EQSD: 担当/遠藤俊貴 三崎洋輔

機械設備 ユニ設備設計: 担当/寫田成二

電気設備 EOSplus: 担当/遠藤和広 野口亮太郎 福島颯太

植栽計画 NiwaMori: 担当/三浦豊

VI 計画 SURMOMETER: 担当/宇野昇平 伊奈麻衣子

監理・土木発注者支援 SO&CO. 都市環境研究所 檜垣幸志建築設計事務所

EQSD ユニ設備設計 EOSplus

【施 工】 建築 荒牧建設: 担当/大河内利雄 鈴木則雄

土木 小山田産業開発: 担当/小山田和也

空調・衛生 ユアテック: 担当/阿部章

電気 ユアテック: 担当/高久哲也

家具 ラ・ビーダ: 担当/渡部信一郎 伊藤寛樹

「特別賞」1 作品

小規模建築物部門

◆二世帯で住む、巨木の住処

【所在地】 宮城県仙台市青葉区

【設計監理】 Ginga architects 武田幸司

【構造設計】 MAF 一級建築士事務所 皆本建築工房 皆本功

【施 工】 株式会社 絆建築 伊辺佑成 板垣凌

(8) 講評
作品賞

【南三陸ワイナリー】

「南三陸ワイナリー」は、東日本大震災で甚大な被害を受けた南三陸町に再建された水産加工場のプレハブ建築を再利用したリノベーション施設で2020年10月に竣工しました。当施設は、ワインの醸造・熟成スペース、ワインや海の幸を味わえるショップからなり、海の見える展望テラスも増築していて、少ない予算の中でプレハブのリユース材を積極的に使用し、カスタマイズしやすい仕掛けを施しています。またぶどう畑に使用していた木ぐいの再利用やボランティアらによるDIYによって施工費削減を図るとともに、多くの人を巻き込むプロジェクトとなっています。震災後、当たり前のように存在していたプレハブ建築も、今では多くの被災地で見られなくなっており、復興過程の記憶を継承するという点でも「南三陸ワイナリー」は意義深い存在と言えます。さらに年毎に変わるワインラベルや商品パッケージのデザインなど、事業全体のブランディングにも設計者が携わっており、地域貢献や地方創生への寄与が求められる、これからの建築家像を体現している点でも大いに評価できます。

【八戸市美術館】

八戸市中心市街地に位置し商店街、市役所、銀行などに隣接する美術館は、様々な形の植え込みやベンチなどが散りばめられている広場を中心に、市民が気軽にアプローチできる施設となっています。トラス構造による明るく解放的な大空間「ジャイアントルーム」がエントランスホールであり、休憩、展示、製作のスペースとして市民が自由に参加しやすい空間となっています。2室に分節できるギャラリー、高天井のスタジオ、ワークショップ、映像展示のブラックキューブ、大展示のホワイトキューブ、コレクションラボ、など「個室群」はどの部屋も「ジャイアントルーム」に面していて、様々な組み合わせにより多様な使い方や新しい試みを可能にしています。収納展示主体の美術館から地域の風土や文化に根ざしたプログラムを主体とした美術館であり、アートの枠を超えた市民の多様な活動の可能性を感じます。コミュニティ施設としての美術館のあり方として、東北建築作品賞に相応しいと評価されました。

【シェルターインクルーシブプレイス コパル(山形市南部児童遊戯施設)】

この作品は、様々な文化や思考、障害も含めて多様な背景を持つ子供たちのために山形市が建設した教育・文化・体育の拠点として建設された施設です。設計者は、誰もが使える“ユニバーサル”デザインではなく、“インクルーシブ”という概念を提唱し、多様な人たちがその個性や特性を有しながら、集まれる場所を設計しました。その取り組みでは、企画段階から、設置者、運営者、施工者、利用者を巻き込んで議論を重ね、計画・設計を進めたプロセスは特筆に値します。体育館から遊技場までを緩やかにつなぐ空間と、蔵王連峰に溶け込む屋根の形状、それを実現する鉄骨立体トラスと木造アーチの構造計画などが、子供だけ

でなく大人も引き付ける魅力的な建築として実現しています。地域の木材を利用した遊具・ベンチ、手すり、照明器具など細やかな配慮・工夫も丁寧に施されています。効率性・採算性が重視され、画一的な建築になりがちなPFI案件でありながら、東北の山形にふさわしい地域性・個性を有しながら、全国の“インクルーシブ”建築の代表モデルとなりうる作品です。以上より、東北建築賞作品賞にふさわしいと高く評価されました。

【yodge】

yodgeは、福島県玉川村の四辻地区にある70年以上前に建てられた旧分校を村全体の活性化のために、泊まり・集え・子どもたちが遊べる場としてリノベーションした観光交流施設です。校庭からの外観の保全や既存材の再利用、或いは丁寧なランドスケープづくり等、地域の風景と地域活動を継承していこうとする試みを感じられます。内部空間においては、片側廊下型から中廊下型に既設の界壁を教室側に移設し、廊下だった箇所には、水廻り等を違和感なく納めており、誰もが思い浮かべる学校らしい片側廊下型のデザインの継承がなされています。かつての教室は宿泊室として防火性能を室内側で確保する等、廊下側のデザインを損ねない工夫がなされています。また、既存の天井高さにルーバー天井を設けたカフェレストランや四辻ギャラリーにおいても、図面表現で解体箇所を示す点線のような既存空間の面影を感じさせるリノベーションを実現させています。発注者や地域の人々においても、風景と地域を継承していこうとする強い意志が感じられる作品です。

特別賞

【二世帯で住む、巨木の住処】

歴史ある門前町の中を走る旧街道沿いの、密集した住宅地にこの住宅はあります。住宅地の狭い路地を入り込んだ先に見える外観は、2階部分が張り出したシンプルだけれども特徴的なものとなっていますが、外観からは巨木の印象はありません。しかし内部に入るとその印象は一変し、中央の木製タイルで装飾されたエレベータシャフトを中心としてらせん状に連続的に配置された空間の構成が、まるで巨木のまわりをぐるりと回りながら上っていくような感覚を与えてくれます。また、各空間の光は光天井とハイサイドライトによってうまく取り入れられており、住宅の密集地で開口部が取りにくいにもかかわらず閉塞感を殆ど感じません。巨木を模したエレベータでも行ける屋上階は計算され尽くした庭園となっており、密集する隣接建物から解放された景観を望むことができます。密集住宅地にある、決して広くはない敷地に隠れていた魅力を最大限まで引き出し、広がりのある空間を実現しているこの作品は、狭小地における住宅の可能性を示すものと言えるでしょう。

第43回東北建築賞作品賞選考委員会

- ・増田 聡 (東北大学大学院経済学研究科地域計画研究室)
- ・前田 匡樹 (東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻)
- ・有川 智 (東北工業大学建築学部建築学科)
- ・石山 智 (秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科)
- ・新井 信幸 (東北工業大学建築学部建築学科)
- ・崎山 俊雄 (東北学院大学工学部環境建設工学科)
- ・本郷 智大 (山形県立産業技術短期大学校建築環境システム科)
- ・濱 定史 (山形大学工学部建築・デザイン学科)
- ・大宮 利一郎 (楡山山設計)
- ・六本木 久志 (建築舎・アトリエR)
- ・大野 晋 (東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻)

第32回東北建築作品発表会報告

常議員 大野 晋

2022年10月8日(土)に、オンライン(ZOOM)にて第32回東北建築作品発表会が開催された。本発表会は、東北建築賞作品賞応募者に作品についてプレゼンテーションをして頂くものであり、作品賞の1次審査を兼ねると共に、学会と地域社会との交流の推進、建築関係者の研鑽、ならびに東北地方の地域特性に立脚した建築作品の探求を目的としている。本年度は小規模建築物部門9作品、一般建築部門22作品の計31作品であった。発表会においては、まず速水清孝支部長より挨拶があり、その後、増田 聡選考委員長により発表にあたっての注意事項が説明された。その後の発表では、1作品につき質疑応答含7分の短い持ち時間であったものの、設計者から作品のコンセプトやアピールポイントについて充実したプレゼンテーションが行われた。質疑応答も1分という短い時間ではあったものの、活発な議論がなされ、活気のある発表会となった。

参加者は163名で盛会であった。今回は昨年度に引き続きオンライン開催となったが、事前の準備と参加者の協力によって滞りなく実施することができたと考えている。次年度以降の開催形式がどのような形になるかは不透明であるが、今後も開催方式に関わらず、さらに関係団体、大学などを通じた積極的な案内を行い、より活気のある発表の場にするよう努めていきたい。

また、第32回東北建築作品発表会で発表される31作品と前回受賞した第42回東北建築賞作品賞が掲載されている東北建築作品集2022を刊行した。いずれも、近年の東北地方における建築活動の一端を示す貴重な建築作品であり、東北地方の建築にとっての共通課題の探求につながるものである。

日本建築学会「作品選集2023」東北支部 選考経過報告

東北支部選考部会長 手島 浩之

「作品選集2022-2023」の掲載選考にあたり東北支部には、16作品の応募があり、1作品が失格となり15作品が選考対象となった。支部書類審査(リモート)を経て9作品が現地審査の対象となった。

現地審査を踏まえた支部審査会(リモート)では5作品(Aランク2作品、Bランク3作品、Sランク0作品)を本部に推薦することにした。本部の審査会(リモート)では、事前の個々の審査による投票結果をベースに、4作品が掲載されることになった。

支部審査会においても、本部審査会においてもリモートでの審査が特別なものでなくなってきており、現地審査においても人数制限を課した審査となっている。社会状況によって、審査方法は変わっていくのは当然であるが、「作品選集」というもの自体をどのような位置づけとしていくのか、支部を含めた活発な議論が求められている。

2022年度日本建築学会設計競技 東北支部審査報告

審査委員長 坂口 大洋

日時: 2022年7月7日(火) 10:30~11:30

会場: オンライン会議(ZOOM)

出席委員:

- 斎藤 光 (はりゅうウッドスタジオ・パートナー)
- 坂口大洋 (仙台高等専門学校教授)
- 田澤紘子 (宮城大学特任助教)
- 手島浩之 (都市建築設計集団/UAPP 代表取締役)
- 濱 定史 (山形大学助教)

課題: 『「他者」とともに生きる建築』

応募総数: 11点

1. 審査方法

- ・委員の互選により、審査委員長として坂口委員、議事録作成者として坂口委員が選出された。
- ・応募総数が11点であることから、応募規程「G.審査方法」により、最大4点を支部入選とすることを確認の上、全応募作品を審査した。
- ・11作品を対象に、入選に相応しいと判断した作品に、1審査員につき事前に4票以内を投じる方式で行った。

2. 審査経過

- ・各委員の投票を集計した結果、No.3(4票)、No.6(5票)、No.7(4票)、No.9(1票)、No.10(2票)、No.11(2

票) が得票した。これらについて、上位作品から順に、支部入選に値するか否かの協議を行った。

・ 4票以上を確認した3作品を支部入選作品として候補とし、得票同数のNo10とNo11の作品を再度審査員で投票を行いNo.10(1票)No.11(4票)となり、No.11も支部入選作品に追加することとした

・ 以上4作品を入選作品としてふさわしいことを全員で確認し、支部入選作品とした。

3. 審査結果

審査結果、審査員評(◎:支部入選作品)

◎No.3「クリーション アンド ラーニング トープ」
工場のコンバージョンとして、駅前の空間を中心とした地域再生に寄与する可能性が高い

◎No.6「郷土の遡上-サケ漁から広がる復興まちづくりの提案」

長期的な復興まちづくりの視点とプログラムの社会的意義が大きい

◎No.7「畏怖」

記憶を伝承する空間的な造形力の質が高い

◎No.11「まちなか水槽」

自己と地域内の他者に着目するアプローチが、課題に即している。

4. 入選作品の講評執筆者

・ 入選作品の講評執筆者を、以下の通り決定した。坂口委員長は審査報告(支部年報)も執筆する。

・ ◎No.3「クリーション アンド ラーニング トープ」
濱委員

・ ◎No.6「郷土の遡上-サケ漁から広がる復興まちづくりの提案」
田澤委員

・ ◎No.7「畏怖」
斎藤委員

・ ◎No.11「まちなか水槽」
手島委員

2022年度第85回支部研究報告会

前常議員 一條 佑介

2022年度東北支部研究報告会「みちのくの風2022 秋田」は、2022年6月18日(土)にオンライン(Zoom)を会場に開催された。発表総数は、計画系45題、構造系28題の合計73題であった。当日は4会場に分かれ、環境・計画+歴史意匠・構造・材料施工の分野ごとに活発な意見交換が行われた。また同日には、建築デザイン発表会および特別企画として、1)令和4年3月16日の福島県沖の地震 災害調査報告会、2)田辺会長の基調講演会「カーボンニュートラル実現のための建築分野の役割」、3)オンライン見学会「あきた芸術劇場ミルハス」が開催された。

本報告会は、新型コロナウイルス感染症の流行以来、2回目のオンライン開催だったが、参加された方々をはじめ、

準備運営に関わった関係各位のご支援のお陰で無事終了することができた。

ちなみに、2021年度の発表総数は、計画系35題、構造系21題の合計56題であった。2022年度の発表総数は昨年度より17題増加し、新型コロナウイルス感染症の流行前の水準に戻りつつある。

2022年度 第8回日本建築学会東北支部 建築デザイン発表賞 選考報告

選考委員長 櫻井 一弥

1. 応募講演

5講演

2. 選考経過

2-1 建築デザイン発表会

2022年6月19日(日) 11:00~11:55

於: Zoomによるオンライン発表

今回は、昨年、一昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、みちのくの風2022がオンライン開催となったことに伴い、建築デザイン発表会もZoomを用いたオンライン開催となった。

応募5講演について、Zoomの画面共有機能を用いた発表が行われた。限られた発表時間の中でそれぞれのコンセプトが紹介されるとともに、活発な質疑回答が行われた。発表会は滞りなく進められた。時間厳守にご協力いただいた発表者各位、聴講者各位に感謝申し上げたい。

2-2 選考委員会

2022年6月19日(日) 12:00~12:30

於: Zoomによるオンライン会議

発表全体を聴講した建築デザイン教育部の部会員4名(下記参照)で、建築デザイン発表賞にふさわしい講演を選出することとした。

内規に従い、計5件の講演より1つの講演を選出することを確認し、部会員相互で協議した。様々なタイプのプロジェクトがある中で、どのように賞を選出するか、議論が難しかったが、最終的にはそれぞれのプロジェクトを多角的な視点から評価し、議論を通して決定することとした。

その際、内規に記載の通り、建築デザイン発表会を欠席する部会員には事前に講演梗概を開示し、賞にふさわしい候補を挙げてもらうこととしていたが、欠席の部会員からは特に候補が挙がらなかったため、選考委員会に出席の部会員の意見で決定した。

結果、次節に示す講演に第8回建築デザイン発表賞を授与することとした。

選考委員長： 櫻井 一弥（建築デザイン教育部会長、東北学院大学）

選考委員： 小地沢将之（建築デザイン教育部会幹事、宮城大学）

大沼 正寛（東北工業大学）

馬渡 龍（八戸工業高等専門学校）

3. 選考結果

第8回日本建築学会東北支部建築デザイン発表賞 1点

「福島県いわき市医療センターのプログラム設計(4)

-開業以降の経営課題と諸問題に向けて」(E4)

湯本 長伯（社会構造設計研究所）

4. 講評

福島県いわき市医療センターの建替えに伴うプログラム設計に関する、過程報告の第4報である。

築後40年近い老朽化した施設に対する早期建替えの要請が高まる中、建設物価の高騰や立地計画に対する地域住民同意の困難性などを踏まえ、現地建替えとなった本施設において、省エネによるコスト削減と災害時の事業継続、さらに外部専門能力の活用という観点から、ESP（エネルギー・サービス・プロバイダー）方式を導入した経緯が示されている。最も特徴的なのは、同敷地内の使わなくなった病棟を利用して、新規に整備した病室と同じ意匠・設備のモデル病室を作り、実際の使い勝手などを検討しているところである。

プロジェクト全体のプロセス設計と病院のプログラム設計という実務の紹介に留まらず、上記のモデル病室の整備によってPOE（post occupancy evaluation = 入居後評価）の実施可能性を探っている部分は、非常にユニークな視点である。

選考委員会では、そうした部分が高く評価され、今回の賞に選出された。

2022年度日本建築学会東北支部総会報告

常議員 谷本 裕香子

日時：2022年5月14日（土） 15:00～15:30

場所：オンライン（Zoom）

出席者：20名

資料：

日本建築学会東北支部年報第42号

2021年度日本建築学会東北支部総会式次第

資料1-1： 2021年3月31日現在 貸借対照表

資料1-2： 2021年度 正味財産増減計算書（予算との比較）

資料1-3： 2021年度 正味財産増減計算書内訳表

資料1-4： 2021年度 同上（事業毎の決算比較）

資料2： 2021年度 会計監査報告書

資料3-1： 2022年度 正味財産増減予算書

資料3-2： 2022年度 正味財産増減予算書内訳表

資料3-3： 2022年度 正味財産増減予算書（事業毎の予算 昨年度と比較）

宮崎渉常議員による開会宣言の後、同常議員の司会により、以下の要領で総会が行われた。

1. 出席者数の確認

出席者20名の確認がされた。

2. 支部長挨拶

石田壽一支部長による挨拶があり、コロナ禍における東北支部の現状および今年度のみちのくの風2022はオンライン開催されることが報告された。

3. 議事録署名員の選出

出席者の中から議事録署名員として、恒松良純氏及び市岡綾子氏が選出された。なお、事業報告・決算報告は5月の本部通常総会での報告事項となっており、支部総会では報告のみとし議長は設けないこととした。

4. 議事

東北支部規程により、以下（1）（2）の事項について報告がされた。

（1）2021年度事業及び会計に関する件

1) 2021年度事業

菅野秀人常議員より、支部年報25～26ページの「2021年度事業報告」に基づき、2021年度事業内容が報告された。

2) 2021年度収支決算

中嶋典之常議員より、資料1-1「貸借対照表」、資料1-2「正味財産増減計算書（予算との比較）」、資料1-3「正味財産増減計算書内訳表」、資料1-4「正味財産増減計算書（事業毎の決算比較）」に基づき、2021年度収支決算が報告された。

3) 会計監査結果

畠山雄豪支部監事より、資料2「会計監査報告書」の通り、2021年度の会計内容については疑義のない旨の会計監査結果が報告された。

（2）2022年度事業及び会計に関する件

1) 2022年度事業計画（案）

佃悠常議員より、支部年報27～28ページの「2022年度事業計画（案）」に基づき、2022年度事業計画案が説明された。

2) 2022年度収支予算（案）

中嶋典之常議員より、資料3-1「正味財産増減予算書」、資料3-2「正味財産増減予算書内訳表」、資料3-3「正味財産増減予算書（事業毎の予算 昨年度と比較）」が説明された。

上記（1）（2）の報告内容について、特別な問題指摘などは無かった。

以上の議事終了の後、司会者により閉会が宣言され、2022年度日本建築学会東北支部総会を終了した。

研究部会活動報告

(1) 建築史・意匠部会

部会長 飛ヶ谷 潤一郎

今年でコロナも3年目を迎えた。少しずつ収束に向かってはきたものの、感染者が急増する時期は何度かあったため、諸々の部会活動はオンラインで行われた。オンラインの行事が続くと、部会費も用途がなくなる。そこで今年も他支部や他分野の専門家をお招きして、3月19日(日)に「歴史的建造物をもつ「しなやかさ」(レジリエンス)」と題するシンポジウムを行った。この部会シンポジウムでも、9月に行われた部会のときに、部会員からいくつかの案をあげてもらい、その後さらに少数の実行委員で議論を重ねながら決定した。昨年のテーマは建築家に関するもので、東北地方と直接の関係はなかったが、今年3月には昨年3月とおおむね同じ場所で歴史的建造物の地震被害が発生したため、災害やSDGsに関連したテーマとすることはかなり早く決まった。

今年度のシンポジウムは、企画・司会の中村琢巳氏(東北工業大学)を中心とした6名の登壇者からなり、そのうち3名は外部から招待された。参加者は30名程度であったが、質疑応答も積極的に行われ、建築史学のみならず、保存修復学、社会学、環境学などのさまざまな分野の研究者や建築家が意見を交換し合う、たいへん充実したひとときだったと思う。筆者は今年で部会長を退任するが、今後もテーマを少しずつ変えながら、定期的に開催されるように引継ぎをしたいと考えている。

部会長としての私は、震災後の諸々の対応では不手際も多かったと思うが、前部会長の速水清孝氏(日本大学)が東北支部長に選出されたことは、まことに喜ばしく、そして頼もしかった。今回のシンポジウムでもまとめ役としてご尽力いただいたように、建築史というマイノリティの立場からもさまざまな情報発信をすることで、異分野間での交流が活性化されることを期待したい。

(2) 建築計画部会

部会長 坂口 大洋

日本建築学会東北支部建築計画部会のメンバーの年度内活動の一つとして、2022年3月16日に発生した福島沖を震源とする地震に対する被害調査を、昨年度末に行い本年度に入りの課題整理を施工部会とともに行いました。

また、建築学会のウイズ/アフターコロナに適応する建築・都市に関する特別調査委員会(主査大月敏雄先生(東京大学))における関連調査として、宮城県を中心とした文

化施設における施設利用における感染対策の状況、及びコロナ禍における施設利用状況の推移などの調査を行った。様々な課題が散見されたが、特に動線計画におけるゾーニングの重要性や地域の市民活動団体の活動量の低下などが再認識された。

(3) 地方計画部会

部会長 小地沢 将之

地方計画部会は、引き続き「小地域のエリアマネジメント」をテーマに、教育研究や実務のさまざまなフィールドで活躍する部会員の関心領域の擦り合わせを行った。

昨年3月16日に発生した福島県沖地震に際しては、生活関連の被害のとりまとめを当部会として引き受け、災害調査速報としてとりまとめた。東日本大震災や令和元年東日本台風、一昨年2月の地震など、相馬市などでは多重被災に見舞われており、防災力が向上している反面、住宅不足などが深刻化しているようすを確認できた。調査結果は、みちのくの風と大会で開催されたオンラインでの報告会において報告した。

本年3月5日には、部会主催のオンラインシンポジウム「官と民のあいだのまちづくり」を開催した。部会幹事の増田聡先生(東北大学)からは「公民連携の現在」、榊原進氏(NPO法人都市デザインワークス)からは「仙台市内におけるエリアマネジメントの実践事例」と題して話題提供いただいた。

討議を通じて、補助金の出し手/受け手の関係に陥ることのない公民連携が理想形であることを確認できた。シンポジウムは全国から20名余りの聴講があった。

ところで、このシンポジウムは3年前に企画し、開催に向けて参加者の募集を開始していながら、COVID-19の感染拡大に伴い、やむなく中止になったものだった。3年前の当時は、オンラインツールは会議の1手法でしかなかったことを考えると、多くの方を巻き込んだ対話手段として定着し、私たちのコミュニケーションの方法が格段と進化した3年間であったことをあらためて実感できた。

(4) 構造部会

部会長 前田 匡樹

2022年度は、新型コロナウイルス感染症に伴う行動制限などの社会情勢により、大幅に活動が制限された。見学会、JSCA東北支部との共催の講演会も開催が見送られた。

部会単独での活動が制限される中で、東北大学で開催された特別講演会を構造部会にも公開し、オンライン形式

で聴講していただくことで、情報交換や研鑽の機会を設けた。

チャルマーズ工科大学研究員・東北大学客員助教・後藤豊氏による連続講演「建築構造とサステナブルデベロップメント」(7月4日)、「木材の性能と木質材料」(7月11日)、「各地の木質構造への取り組み」(7月25日)を開催した。

2023年度は、新型コロナウイルス感染症の5類への移行で社会活動が平常時に戻りつつある状況から、従来の活動を再開していく予定である。

(5) 環境工学部会

部会長 長谷川 兼一

環境工学部会では、昨今のカーボンニュートラル実現という社会ニーズへの貢献を意識して、「東北地方の建築・都市の統合的な環境負荷削減のあり方に関する研究」という研究テーマを設定している。また、今年度は支部研究補助費の枠組みで「建築環境・設備分野における BIM 関連技術の動向に関する調査研究」に着手することができた。この補助費を活用して、定常の部会(6月、10月、12月)に併せて先端的に BIM 関連のデジタル技術を建築設計・施工に活用している組織やアプリケーション開発を行っているベンダー企業の方々から、最新情報を提供いただき部会内で共有することができた。このような話題提供により現況の理解を深めるとともに、部会の共通テーマの一つとして BIM 関連技術に関する活動を継続することとしたい。また、当部会では、毎年度、親と子の都市と建築講座を提案しているが、今期も8月29日に秋田(『リモート「スマハキッ」でスマートハウスの実力を体感しよう』)を拠点として Zoom を用いてのオンライン開催とした。部会開催は遠隔会議システムを活用した会議としているが、在仙以外の部会委員が出席しやすく、情報共有や議論でき新しい部会活動のあり方になっている。

今年度、「令和4年3月16日福島県沖の地震」への災害調査連絡会議の活動に参画し、部会では建築設備の被害調査を分担した。調査に当たっては、当部会の他、空気調和・衛生工学会東北支部、電気設備学会東北支部、建築設備技術者協会東北支部と合同の組織を立ち上げ、建築設備分野の総合協力体制のもと現地での被害を把握した。この活動の途中経過を、6月のみちのくの風2022での災害調査報告会、ならびに2022年9月の全国大会での緊急調査報告会にて報告した。設備被害は発災直後からある程度時間が経過した段階の方が情報が整理されていることが多いため調査結果の発信にはタイムラグはあるが、現在も情報分析を継続している。

(6) 材料部会

部会長 石山 智

2022年度の材料部会では、2020度までの活動「サステナビリティ確保に向けた建築材料からの取り組み」と、2021年度に実施した「建築材料教育における遠隔授業とその効果」における教育分野におけるオンライン活用の2つを統合した新たな建築材料教育模索をテーマとして幹事会を1回、部会を2回開催し、活動を行った。本テーマは継続7年目となりこれまで様々な活動を行ってきたが、今年度はこれまでに整備してきた教育ツールの見直しを主として行うとともに、第2回の部会では施工部会と共同で講演会を開催した。

第1回部会は10月19日にZoomを使用して会議を行い、教育ツールの現状と修正点などについて確認を行い、各教育機関における教育ツールの使用状況や授業の状況について情報交換を行った。この中で、教育ツールの多くの内容で新しい情報への更新が求められていることを確認した。第2回部会は12月19日に施工部会と合同で、室蘭工業大学の濱幹雄先生、北海道立総合研究機構の谷口円先生をお招きして寒中コンクリートに関する講演会を実施した。講演会は実務的な内容だけでなく学術的な内容についても多くの情報交換が行われた非常に盛況な会となり、同時に教育ツールに反映すべき多くの内容を得られた会となった。

昨年度の活動において見えてきたのは、遠隔化による新たな教育の必要性とともに教育と実務(現場)とのもっと身近なリンク構築の「可能性」であり、今年度実施した講演会ではさらに教育と実務(現場)とのもっと身近なリンク構築の「必要性」を強く感じた。今後はこのリンク構築を見据えた材料教育の向上を目指して活動する予定である。

(7) 施工部会

部会長 西脇 智哉

2022年度の施工部会は、前年度から部会長が交代し、東北地方の建築施工に直接的な関連のある活動テーマから、特に寒中コンクリート工事に関して取り組んだ。第1回部会を7月26日、第2回部会を10月5日、第3回部会を材料部会との共同開催で12月19日、第4回部会を3月22日に実施し、そのいずれも対面とオンラインを併用するハイブリッド形式とした。

第1回部会では、建築施工に関連する活動内容の候補として、①東北地方における寒中コンクリート工事の現状、②若材齢コンクリートの強度推定に適用可能な非破壊検査手法、③コンクリートのCCS(CO2 Capture and Storage)、④コンク

リート3Dプリンタ、オンラインでの現場管理・現場見学について、話題提供を行った。これを踏まえて、第2回部会において、東北地方における寒中コンクリート工事を中心に活動を行うことを確認した。現在、本会では「寒中コンクリート施工指針」の改定作業が行われているが、南北に長い東北地方では寒中コンクリート工事に対する切迫度は地域により異なり、その実態はこの指針改定に当たっても十分に反映させることが容易ではない。このような実情を踏まえて、第3回部会として、指針改定委員会の委員長・幹事を務められている濱幸雄教授（室蘭工業大学）・谷口円博士（北海道立総合研究機構）のお二人をお迎えして、材料部会と合同で寒中コンクリート工事に関する講演会を実施した。仙台市内会議室において、対面参加20名・オンラインでは約50名（部会員所属の建設会社他地域の支店職員などを含む）と多数の参加をいただいた。北海道地域での実態をご紹介いただくとともに、東北地方における実施工例などを紹介し、広い意見交換を行う盛会となった。北海道支部との連携も今後視野に入れた活動を行いたい。第4回部会では、2023年2月に北海道での寒中コンクリート工事現場を訪問した様子を西脇から紹介して意見交換を行うとともに、次年度も継続して取り組むことを確認した。

(8) 建築デザイン教育部会

部会長 櫻井 一弥

2022年度は、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、6月の「みちのくの風」はオンラインでの開催となり、それに合わせて「第8回建築デザイン発表会」もオンラインでの開催となった。応募5講演について、Zoomの画面共有機能を用いた発表が行われた。また、もう一つの大きな事業として、2014年度よりJIA（日本建築家協会）東北支部との共催で実施している「建築学生テクニカルセミナー2022」を対面方式で開催し、実りある成果が得られた。

第8回建築デザイン発表会は、2022年6月19日（日）11:00～11:55に行われた。限られた発表時間の中でそれぞれのコンセプトが紹介されるとともに、活発な質疑回答が行われ、発表会は滞りなく進められた。その後、建築デザイン発表賞選考委員会を開催し、1題を第8回日本建築学会東北支部建築デザイン発表賞として選出した。賞の選考過程に関する詳細並びに講評については「2022年度 第8回日本建築学会東北支部建築デザイン発表賞 選考報告」を参照されたい。

建築学生テクニカルセミナー2022は、2022年12月17日（土）10:00～12:00に、せんだいメディアテーク1階オープンスクエアで行われ、学生約30名、建築関係者約20名の計約50名が参加した。コロナ禍ではあったが、宮城県内での新規感染者数が落ち着いた状況のため対面開催ができた。

上記2つの大きな事業に加えて、第26回JIA東北建築学生賞に対する本部会からの審査員派遣を行った。実施日時は2022年10月27日（木）12:30～18:00、実施場所は仙台市市民活動サポートセンターである。なお、出展者である学生はオンラインでの参加であった。

2023年度も、引き続き新型コロナウイルス感染症の状況を慎重に見極めながら、活動を決定していく予定である。

(9) 災害調査連絡会

委員長 佐藤 健

災害調査連絡会では、地震などの自然災害が発生した際に、迅速な被害調査、及び、復興支援活動を実施するための組織と連絡体制の整備に継続して取り組んでいる。委員長（佐藤健）のもと、東北支部内の研究部会の各部長及び部会推薦委員からなる連絡・調整幹事会を設置し、本部災害委員会・東北支部代表委員（東北工業大学・堀則男教授）と連携しながら、災害発生時の情報発信と共有、被害調査の調整などを行っている。

2022年度は、2021（令和3）年3月16日23時36分に発生した福島県沖の地震（M7.4）の発生により、建築物等にも被害が発生したことを受け、東北支部災害調査連絡会が中心となり支部内の各研究部会と連携して被害調査を実施した。調査結果については、「令和3年3月16日福島県沖の地震災害調査速報」としてとりまとめた。

また、2022年6月18日（土）には、みちのくの風—2022秋田の特別事業として、「令和4(2022)年3月16日福島県沖の地震 災害調査報告会」をオンラインで開催し、調査概要の報告と総合討論が行われた。

さらに、本部災害委員会との連携に基づき、2022年度日本建築学会大会（北海道）の災害部門—緊急報告会として、「令和4（2022）年3月16日福島県沖の地震—災害調査報告会」が、9月8日（木）9:00～11:30、オンラインで開催された。東北大学の源栄正人名誉教授による指定発言において、壊れたものと壊れなかったものの「被害の際」を科学的に明らかにする調査の重要性が指摘された。まとめでは、調査方法や調査票様式などが異なる複数の学協会の連携による共同調査の実施にあたっては、円滑な調査開始のためにも、平常時からの情報交換や情報共有が重要であるとまとめられた。



みちのくの風—2022 秋田の特別事業

支所だより

青森支所

青森支所長 川島 芳正

青森支所では、毎年全員協議会の時に、基調講演を開催しております。

今回は、10月5日に、青森市のワ・ラッセにて八戸工業大学の月永洋一先生をお招きして、「コンクリート表層部の品質」という題目で、講演していただきました。

コンクリートの、打設時のバイブレーションを規定通りにやらない場合とやった場合の仕上がったコンクリートの仕上げの綺麗さ、綺麗だけでなく強度が違ったり、養生期間を規定より短くした場合の強度の差が、規定の8割しか強度であり、1日で養生終了したら半分も強度がないことなどを説明いただき改めて、養生の重要性や、しっかりと施工とそれを監理することの重要性を学びました。

青森支所は来年度、東北の風の開催県になります。タスクフォームの皆様と一緒に、どのような事ができるのかを現在打合せ中です。

オンライン開催ということで、青森に足を運んでいただくことは難しいのですが、それも青森の建築の魅力を少しでも感じていただける工夫をしたいと考えております。



基調講演の様子

(10) 津波に強い建築を活用した津波減災研究委員会

委員長 田中 礼治 (東北工業大学名誉教授)

副委員長 船木 尚己 (東北工業大学建築学科 教授)

2011年の東日本大震災の被害状況から見て、少なくとも次のことが言えると考えている。

- ① 亡くなった人が多すぎる。
- ② 流失した建物が多すぎる。

多すぎるのだから、減少させる必要があると考えるのは誤ってはいないと思う。即ち、津波減災対策を行う必要があると考えられる。

東日本大震災の時もそうであったが、これまで津波という災害は土木分野の方が処理するものとして扱われてきたと思う。別に建築分野の方が関係して悪いということはないと思うが、津波に対する建物関係の方々の足並みが多少遅かったということが言えると思う。

一般の地震の被害も、1981年の基準法の改定により飛躍的に被害率が低下したということは、「建築もやればできる」ということを示していると考えている。即ち、「津波についても建築もやればできる」と思っている。これが建築を活用する大きな理由である。結論的には、「津波に強い建築」を活用することによって津波減災ができると考えている。

「津波」と「避難」、「逃げる」は古くからワンセットとして、また、日常生活の知恵として用いられてきた。しかし、近代建築が非常に強いことが東日本大震災で認められたことから、最近海に近い津波避難タワーなどが建設されるようになってきた。東日本大震災以前には見られなかったことである。これまで見られなかった津波に強い建築を自由に使いこなすことによって、「津波」と「避難」をセットで考える必要のない時代がもうすぐ来るのではないかと考えている。津波で亡くなる方がなくなる時代も近いのかもしれない。本研究委員会の成果を期待していただければ幸いである。

秋田支所

秋田支所長 松本 真一

毎年のことながら、支所主催の「秋田県工業系高校生徒による建築設計作品コンクール」が活動の中心でした。昨年同様にコロナ禍中の行事ゆえ、応募作品10点(制作参加

者のべ20名)と若干寂しいものでしたが、展示・表彰会場を JR 秋田駅に近接する秋田拠点センター・アルヴェ(秋田市民交流プラザ)内のきらめき広場に設けることができたため、より多くの一般市民の皆様に我々の活動を知っていただき、また若い建築学生の皆さんにエールを送っていただく好機となり、成功であったと存じます。

作品は、コンクールのための新規プロジェクトと異なり、正課科目などで扱った課題をブラッシュアップしたものが大半でしたが、そのアップグレードの中身には先生方の篤い指導やグループでの議論・協働の跡が認められ、全ての作品から若者らしい「伸びしろ」が感じられ、頼もしく思えました。特に今年は、ウクライナ情勢を憂い、その復興を支援する施設の設計(ピカソのゲルニカに見立てた表現)が強く印象に残り、審査員間でも大きな話題になりましたが、最優秀作品賞には秋田県立由利工業高等学校の生徒2名による「結(ゆい)」を選定し、令和5年2月11日に講習会と表彰式(写真)を実施しました。

後援8団体の役員の皆様、裏方として活動をサポートしてくださった秋田県と秋田市の建築行政関係職員の皆様に、この紙面を通じて御礼を申し上げます。

気長な支所活動になりますが、50年の歴史を刻んで来た本コンクールのアーカイブ作成にも着手したところです。



岩手支所

岩手支所長 小野寺 哲志

岩手支所で例年後援している「盛岡市都市景観シンポジウム」が、今年度は2022年11月18日に盛岡劇場で開催されました。今年は基調講演に、地元テレビ局で番組MCを務める天津木村氏をお迎えしたためか、例年より観客は盛況で、同氏からはハード的な側面に留まらない盛岡の魅力を伺うことができました。



都市景観シンポジウム



紺屋町番屋

また、講演に先立って、盛岡市都市景観賞の表彰式が行われ、大正2年築で令和3年に改修復元工事を実施した「紺屋町番屋」を含む、歴史的な景観を形成する建築2件が受賞しました。

折しもニューヨークタイムズ紙の盛岡紹介記事でも、伝統的な建築物について触れられているようですが、コロナがようやく終息の兆しを見せ始めた来年度は、是非岩手にも足をお運びいただければ幸いです。

岩手支所としても来年度は、地域の建築に貢献し、地域振興や建築物の低炭素化に資する活動を検討します。

山形支所

山形支所長 相羽 康郎



研修室3のG3, G4, G5の討議の様子

4学協代表 ZOOM 会議の結果本年度は、2018-2021 年度活動を踏まえより広く参加者を募って、北高と歴史的建築物をいかした街づくりについて、シンポジウムを開催することになった。講師に山形大学永井康雄氏、山形歴史たても研究会結城玲子氏をお招きし、遊学館3階研修室2,3で開催したところ60名の参加者となった。

(講師の発表：研修室2)

永井講師から、H30年文化財保護法の改正で、保存と活用の大綱と地域計画、特に文化財保存活用区域の設定による総合的なアクションプランの可能性などについて説明があった。結城講師から、歩いて見出し父上が正面を描いたペン画360点に結実した歴史的建築物の保存を、所有者と話し残す苦勞、登録文化財のラベル効果、それらをつなぐ回遊型まちづくりの大切さのお話があった。

(グループ別参加者討議：研究室2,3、まとめと発表：研修室2)

G1：講堂を活用できる部局へ管轄を移し、単体でなく面的に音楽堂と教育役割の施設とするよう、市民の声を行政に届け、5年後150周年を迎えるまでに対策・計画の必要がある。G2：基本的に若い人たちの意見を取り入れる機会を増やし、伝統技術へ近づく交流が必要、お金がかかるハード整備の後のソフトが重要、歴史文化まちづくりの本日のような話し合いを今後も続けていく。G3：所有者不在の場合もある歴史的建築物を生かすには、ヘリテージマネージャー（HM：歴史的建造物保存活用の専門家）が積極的に発言する必要がある。G4：HM養成講座で県内31名のHMが誕生した。リノベは依頼者だけでなく周囲の理解が必要、盛岡、京都、県内長井の成功事例に学ぶと、専門家が地域の意見をまとめることができている。G5：建築補強とリノベに関し技術的な話し合いと、その後の利用に関し参考となる長井第一小学校の、資料館にしたいという思いを確認した。



研修室2のG1, G2の討議の様子

福島支所

福島支所長 渡邊 佳文

2022年度の福島支所の活動状況について報告いたします。

今年度は、『親子の建築講座～親子で学ぼう やさしい建築構造力学講座～』の開催や『建築士事務所キャンペーン』の共催、『第15回福島県建築系高校卒業設計優秀作品表彰』への協賛を中心に活動しました。

「親子の建築講座」は、建築を楽しく知ってもらい、建築への興味を育むことを目的に、8月21日に福島市の「福島県教育会館」で開催し、県内の中学生親子等6名（3チーム）に参加いただきました。ワークショップでは、チームごとに1枚のボール紙で70cm離れた台に架ける「梁」を製作し、吊り下げられるおもりの重さを競いました。増え続けるおもりに耐える梁に対し、会場から拍手が起こるなど大きな盛り上がりを見せました。

「建築士事務所キャンペーン」は、2月8日に会津若松市の御宿東鳳で開催し、一般の方も含め約100人に参加いただきました。「ふくしまからの建築文化発信」と題して福島県の特設サイト「ふくしま建築探訪」のイラストを手がけるBUNGA・NET代表兼編集長の宮沢洋氏が「建築で地域を楽しむ」をテーマに講演し、福島県内の魅力ある建築物を紹介しました。

「第15回福島県建築系高校卒業設計優秀作品表彰」では、県内の建築系学科を有する高校4校の12人を表彰し、高校生活で培った技術や創造性をたたえました。3月6、7日に福島市で開催された優秀作品展では、生徒の様々な工夫やアイデアに溢れるすばらしい作品が並び、多くの県民が見学しました。

福島支所といたしましては、将来を担う子どもたちが誇りと愛着を実感できる新しい未来が形づくられるよう、引き続き、学術的な研究等を広く還元・発信するなど、地域の教育機関や関係団体と連携・協働しながら、地域に根ざした支所活動を更に充実させ、福島の復興・創生に貢献していきたいと考えております。

支部役員会から

常議員（総務企画）恒松 良純

支部役員会は、支部長と14名の常議員で構成される。常議員は、会務を処理するため、支部役員会において会務を審議し、議決するものと定められており、東北支部全体の運営を担っている。支部役員会は、年2回以上支部長が招集することとされているが、基本的には隔月程度の頻度で開催されている。

本年度は、支部役員会が4月、5月、7月、10月、11月、2月、3月と開催され、粛々と会務の処理を行うことができた。支部役員会の開催に際しては、Zoomを利用し、新型コロナウイルス感染防止対策を徹底しながら、出席者の増加に効果を上げている。

毎年恒例の行事である、支部総会と支部研究報告会を核とした「みちのくの風」であるが、コロナ禍のため昨年度に引き続きオンライン（Zoom）を利用して開催し、研究報告集第85号（構造系・計画系）とCD-ROMを発刊した。特別企画として、令和4年3月16日の福島県沖の地震 災害調査報告会、会長基調講演会、オンライン見学会を開催して盛会に終了した。

また、東北建築賞作品賞部門については昨年度引き続きオンラインを用いて東北建築作品発表会を開催した。

その他、10月には支部長・総務企画担当常議員も出席して支所長会議を実施し、みちのくの風、日本建築学会文化賞の推薦、次年度からの支所交付金の取り扱いについて報告・審議と意見交換を行った。2022年度の支部役員会で取り上げられた主な議事を以下に示す。

■4月支部役員会（2022年4月26日開催）
[報告事項]理事会報告、会計報告、決算報告、代議員常議員選挙結果・役割分担、支部研・デザイン発表会論文募集の報告と懸案事項、令和4年3月16日に福島県沖で発生した地震について、支部年報編集報告 [審議事項]支部総会の業務確認、みちのくの風2022秋田、新常議員の役割分担、事務局職員の給料、2022年度支部長代行と学術推進委員会支部代表、第43回東北建築賞募集要項、2022年度災害委員会支部企画、その他

■5月支部役員会（2022年5月23日開催）
[新旧役員の引継ぎ] [報告事項]年間行事予定と会議形式、会計報告、建築文化週間事業報告、オンラインストレージの使用法、[審議事項]支部長代行者、みちのくの風2022秋田、卒業設計展示会、[審議事項]福島県沖の地震発生にともなう現地審査委旅費、建築文化週間事業、後援依頼など

■7月支部役員会（2022年7月29日開催）
[報告事項]理事会報告、会計報告、支部総会報告、みちのくの風2022秋田開催報告、作品選集2023選考進捗報告、本会設計競技支部審査報告、後援依頼承諾、災害委員会支部企画申請と採択報告、後援依頼承認報告、福島県沖の地震速報と販売、青森支所長交代報告 [審議事項]本会文化賞推薦依頼、本会教育賞推薦依頼、本会大賞推薦依頼、第43回東北建築賞スケジュール、みちのくの風2023青森、後援依頼、その他

■10月支部役員会（2022年10月4日開催）
[報告事項]理事会報告、会計報告、作品選集2023報告、第24期代議員および支部役員選挙、東北建築作品発表会開催報告、JASS5鉄筋コンクリート工事改定講習会開催、本会教育賞（教育業績）推薦報告 [審議事項]みちのくの風2023青森、2023年度支部総会の日程と会場、選挙管理委員会の設置、2023年度設計競技支部審査員、後援依頼、2023年度大会（近畿）における研究集会の録画配信について、その他

■11月支部役員会（2022年11月28日開催）
[報告事項]理事会報告、会計報告、代議員・常議員候補者届出報告、次期設計競技全国審査員・支部審査員選出報告、支部研・デザイン発表会申込受付フォームの進捗状況、第32回東北建築作品発表会報告、JASS5鉄筋コンクリート工事改定講習会開催報告 [審議事項]2023年度支部総会日程・会場・担当・付随行事、みちのくの風2023青森、2023年度支部予算案、支部研究報告集論文募集スケジュール・募集要項、建築デザイン発表会募集要項、支部年報発刊計画、支部研究補助費申請、全国大学高専卒業設計展示会会場確認、後援依頼、支部研発表者数の向上について、その他

■2月支部役員会（2023年2月27日開催）
[報告事項]理事会報告、会計報告、支部研究補助費申請報告、秋田支所からの賞状贈呈依頼承認報告、2023年度全国・大学高専卒業設計展示会の日程報告、支部年報43号原稿執筆依頼、第43回東北建築賞作品賞選考報告 [審議事項]みちのくの風2023青森、2023年度親と子の建築講座と建築文化事業、男女共同参画事業、後援依頼、その他

■3月支部役員会（2023年3月28日開催）
[報告事項]理事会支部長会議報告、会計報告、支部研・デザイン発表会論文提出報告、男女参画事業報告、支部年報編集進捗 [審議事項]支部総会、みちのくの風2023青森、後援依頼、その他

2023年度 支部役員名簿

東北支部常議員の構成と役割分担

役 割	2022年度 (2022年6月～2023年5月)	2023年度 (2023年6月～2024年5月)
支部長	速水 清孝 (日大)	速水 清孝 (日大)
総務企画	佃 悠 (東北大) 谷本裕香子 (東北工大) 恒松 良純 (東北学院大) 市岡 綾子 (日大) 込山 敦司 (秋田県立大)	市岡 綾子 (日大) 込山 敦司 (秋田県立大) 柴山 明寛 (東北大) 中村 琢巳 (東北工大) 権代 由範 (仙台高専)
社会文化	坂口 大洋 (仙台高専) 大野 晋 (東北大) 安田 直民 (SOY source 建築設計事務所)	大野 晋 (東北大) 安田 直民 (SOY source 建築設計事務所)
学術教育	八十川 淳 (東北文化学園大) 佐々木留美子 (東北工大)	八十川 淳 (東北文化学園大) 齋藤 俊克 (日大)
会計会員	中嶋 典之 (JR 東日本) 鈴木 博之 (仙台市)	田中 暁之 (JR 東日本) 笹淵 優樹 (仙台市)
図書情報	高橋 岳志 (日大) 安部 信行 (八戸工大)	安部 信行 (八戸工大) 栗原 広佑 (東北工大)

研究部会長

研究部会	部 会 長
構造部会	前田 匡樹 (東北大学教授)
材料部会	石山 智 (秋田県立大学准教授)
建築計画部会	坂口 大洋 (仙台高等専門学校教授)
地方計画部会	小地沢将之 (宮城大学准教授)
建築史・意匠部会	大沼 正寛 (東北工業大学教授)
施工部会	西脇 智哉 (東北大学准教授)
環境工学部会	許 雷 (東北工業大学教授)
建築ガザン教育部会	櫻井 一弥 (東北学院大学教授)
災害調査連絡会	佐藤 健 (東北大学教授)
津波に強い建築を活用した津波減災研究委員会 (期限付)	田中 礼治 (東北工業大学名誉教授)

東北支部会員数 (2023年3月1日現在)

名誉会員	3名
終身会員	74名
正会員 (個人)	1,117名
正会員 (法人)	33法人
準会員	38名
賛助会員	6法人

支部監事

2023年6月～2025年5月

鈴木 博之 (仙台市)

佃 悠 (東北大)

東北支部選出代議員

任 期	代 議 員
2022年4月 ～ 2024年3月	五十嵐太郎 (東北大学教授) 薛 松濤 (東北工業大学教授)
2023年4月 ～ 2025年3月	小野田泰明 (東北大学教授) 長谷川兼一 (秋田県立大学教授)

支所長

支 所	支 所 長
青森支所	川島 芳正 (川島隆太郎建築事務所代表取締役)
秋田支所	松本 真一 (秋田県立大学建築環境システム学科教授)
岩手支所	佐藤 英明 (岩手県県土整備部建築住宅課建築指導課長)
山形支所	相羽 康郎 (特定非営利活動法人まちづくり山形理事長)
福島支所	星 剛 (福島県土木部建築住宅課長)

一般社団法人 日本建築学会東北支部	自 2022 年 4 月 1 日 至 2023 年 3 月 31 日
2022 年度事業報告	

〈事務の部〉

総 会	1. 2022 年度事業報告・決算報告・会計監査報告 2. 2023 年度事業計画・予算案	2022 年 5 月 14 日 オンライン (Zoom)
諸 会 合	総会 (1)、支部役員会 (7)、支所長会議 (1)、東北建築賞作品賞選考委員会 (3)、設計競技支部審査会 (1)、選挙管理委員会 (1)、作品選集支部選考部会 (2)、司法支援建築会議東北支部運営委員会 (2)、男女共同参画事業 (1) その他部会など開催	() は回数
代議員半数改選	(留任) 姥浦道生、森山修治 (新任) 五十嵐太郎、薛 松濤	2020 年 4 月～2022 年 3 月 2021 年 4 月～2023 年 3 月
支部長改選	(退任) 石田壽一 (新任) 速水清孝	2020 年 6 月～2022 年 5 月 2022 年 6 月～2024 年 5 月
常議員半数改選	(退任) 一條佑介、菅野秀人、曹 森、手島浩之、西尾洸毅 西脇智哉、宮崎 渉 (留任) 坂口大洋、鈴木博之、高橋岳志、谷本裕香子、佃 悠 恒松良純、中嶋典之 (新任) 安部信行、市岡綾子、大野 晋、込山敦司、佐々木留美子 安田直民、八十川 淳	2020 年 6 月～2022 年 5 月 2021 年 6 月～2023 年 5 月 2022 年 6 月～2024 年 5 月
支 部 監 事	高橋良子、畠山雄豪	2021 年 6 月～2023 年 5 月

〈支部事業〉

研究委員会	[部会名] [部会長] [研究テーマ] 構 造 : 前田匡樹 耐震補強技術における新しい試みに関する研究調査 材 料 : 石山 智 サステナビリティ確保に向けた建築材料からの取り組み 建築計画 : 坂口大洋 縮退社会における建築計画の課題抽出と実践化 地方計画 : 小地沢将之 小地域のエリアマネジメント 建築史・意匠 : 飛ヶ谷潤一郎 歴史的建築及び資料の保存・活用に関する研究 環境工学 : 長谷川兼一 東北地方の建築・都市の統合的な環境負荷削減のあり方に関する研究 施 工 : 西脇智哉 建築施工における技術継承と新たな展開 建築デザイン教育 : 櫻井一弥 東北地方の建築デザイン教育の質的向上に関する研究 災害調査連絡会 : 佐藤 健 東北地域における地震及び各種災害が発生した際の調査、広報に関わる連絡や調整および関連事業の企画立案と支援 津波に強い建築を活用した津波減災研究委員会 (期限付) : 田中礼治	
本部・支部研究助成金による研究	建築環境・設備分野における BIM 関連技術の動向に関する調査研究 研究部会: 環境工学部会 (研究代表者 長谷川兼一)	2022 年 4 月～2023 年 3 月
支部研究報告会	2022 年度第 85 回東北支部研究報告会 研究報告集第 85 号計画系・構造系刊行 発表題目 73 題	2022 年 6 月 19 日 オンライン (Zoom)
デザイン発表会	2022 年度第 8 回東北支部建築デザイン発表会 発表題目 5 題	2021 年 6 月 19 日 オンライン (Zoom)
支 部 主 催 支 部 共 催 イ ベ ン ト	1. 支部主催 1) 建築教育文化事業 建築文化週間事業 第 43 回「東北建築賞」募集 2) 第 32 回「東北建築作品発表会」の開催 3) 第 43 回「東北建築賞」の選考	2022 年 10 月 8 日 オンライン (Zoom) 2022 年 10 月～2023 年 1 月

	<p>4) みちのくの風 2022 秋田</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 85 回支部研究報告会 ・第 8 回建築デザイン発表会 ・特別企画事業 <p>①令和 4 年 3 月 16 日の福島県沖の地震 災害調査報告会 WG1：地震・地震動、WG2：建築物の被害 WG3：建築設備の被害調査 WG4：生活関連の被害、WG5：歴史的建造物の被害</p> <p>②会長基調講演「カーボンニュートラル実現のための建築分野の役割」 講演者：田辺新一会長 内容：地球環境問題と建築の関係、IPCC と COP21、COP26 の目標 2050 年脱炭素社会の実現、建築物省エネ法、ZEB・ZEH、 材料・資材の Embodied Carbon 等</p> <p>③オンライン見学会「あきた芸術劇場ミルハス」 内容：見学案内人の紹介と動画による建物概要の紹介</p> <p>2. 支部共催 親と子の都市と建築講座</p> <p>①秋田会場 リモート「スマハキット」でスマートハウスの実力を体感しよう</p> <p>②福島会場 親子で学ぼう やさしい建築構造力学講座</p>	<p>2022 年 6 月 19 日 オンライン (Zoom)</p> <p>2022 年 6 月 18 日 オンライン (Zoom)</p> <p>2022 年 8 月 1 日 オンライン (Zoom)</p> <p>2022 年 8 月 21 日 福島県教育会館</p>
研究部会主催	<p>1. シンポジウム</p> <p>2. その他、部会ごとに講習会・研究会・見学会などを適宜開催</p>	
表彰	<p>1. 日本建築学会設計競技支部入選者 5 名紹介</p> <p>2. 日本建築学会終身正会員 9 名紹介</p> <p>3. 新名誉会員 1 名紹介</p>	<p>2022 年 5 月 14 日 オンライン (Zoom)</p>
支所活動	<p>青森支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幹事会 ・基調講演会「コンクリートの表層部の品質」 <p>秋田支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 51 回秋田県工業系高校生による建築設計作品コンクール <p>岩手支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 45 回盛岡市都市景観シンポジウム後援など <p>山形支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学協会ワークショップ_4 学協会で建築物の保全と実現方策づくり <p>福島支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親と子の都市と建築講座「親子で学ぼう やさしい建築構造力学講座」 ・支所後援事業など 	<p>2022 年 6 月 20 日</p> <p>2022 年 9 月 3 日</p> <p>2023 年 2 月 9 日 (審査会)</p> <p>2023 年 2 月 11 日 (表章式)</p> <p>2022 年 11 月</p> <p>2023 年 1 月 28 日</p> <p>2022 年 8 月 21 日</p>
刊行活動	<p>令和 4 (2022) 年 3 月 16 日の福島県沖の地震災害調査速報</p> <p>支部年報第 42 号発刊</p> <p>東北支部研究報告集第 85 号計画系・構造系ならびに第 8 回建築デザイン発表会梗概集 (CD-ROM) 発刊</p> <p>東北建築作品集 (第 32 号) 発行</p>	<p>2022 年 5 月 31 日</p> <p>2022 年 5 月 14 日</p> <p>2022 年 6 月 19 日</p> <p>2022 年 10 月 8 日</p>

〈支部共通事業〉

講習会	<p>2022 年度日本建築学会支部共通事業</p> <p>「建築工事標準仕様書 JASS5 鉄筋コンクリート工事」改定講習会</p>	<p>2022 年 11 月 16 日 ハーネル仙台</p>
展示会	<ul style="list-style-type: none"> ・全国大学・高専卒業設計展示会巡回展示会 <p>山形市、郡山市、八戸市</p>	<p>2022 年 6 月～11 月</p>
審査会	<ul style="list-style-type: none"> ・2022 年度支部共通 日本建築学会設計競技 <p>テーマ：『他者』とともに生きる建築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本建築学会「作品選集 2023」東北支部選考部会 	<p>2022 年 7 月 4 日 オンライン (Zoom)</p> <p>2022 年 6 月～8 月 オンライン (Zoom)</p>

一般社団法人 日本建築学会東北支部	自 2023 年 4 月 1 日 至 2024 年 3 月 31 日
2023 年度事業計画（案）	

〈事務の部〉

総 会	1. 2022 年度事業報告・決算報告・会計監査報告 2. 2023 年度事業計画・予算案	2023 年 5 月 13 日 オンライン (Zoom)
諸 会 合	総会 (1)、支部役員会 (7)、支所長会議 (1)、東北建築賞作品賞選考委員会 (3)、東北建築賞研究奨励賞選考委員会 (1)、東北建築賞業績賞選考委員会 (1)、設計競技支部審査会 (1)、選挙管理委員会 (1)、作品選集支部選考部会 (2)、研究部会連絡会 (1) 司法支援建築会議東北支部運営委員会 (3)、男女共同参画事業 (1)	() は回数
代議員半数改選	(留任) 五十嵐太郎、薛 松濤 (新任) 小野田泰明、長谷川兼一	2022 年 4 月～2024 年 3 月 2023 年 4 月～2026 年 3 月
支部長改選	(留任) 速水清孝	2022 年 6 月～2024 年 5 月
常議員半数改選	(退任) 坂口大洋、鈴木博之、高橋岳志、谷本裕香子、佃 悠 恒松良純、中嶋典之 (留任) 安部信行、市岡綾子、大野 晋、込山敦司、安田直民、八十川淳 (新任) 栗原広佑、権代由範、齋藤俊克、笹渕優樹、柴山明寛、田中暁之、中村琢巳	2021 年 6 月～2023 年 5 月 2022 年 6 月～2024 年 5 月 2023 年 6 月～2025 年 5 月
支部監事	鈴木 博之、佃 悠	2023 年 6 月～2025 年 5 月

〈支部事業〉

研究委員会	[部会名] [部会長] [研究テーマ] 構 造 : 前田匡樹 耐震補強技術における新しい試みに関する研究調査 材 料 : 石山 智 サステナビリティ確保に向けた建築材料からの取り組み 建築計画 : 坂口大洋 縮退社会における建築計画の課題抽出と実践化 地方計画 : 小地沢将之 小地域のエリアマネジメント 建築史・意匠 : 大沼正寛 歴史的建築及び資料の保存・活用に関する研究 環境工学 : 許 雷 東北地方の建築・都市の統合的な環境負荷削減のあり方に関する研究 施 工 : 西脇智哉 建築施工における技術継承と新たな展開 建築デザイン教育 : 櫻井一弥 東北地方の建築デザイン教育の質的向上に関する研究 災害調査連絡会 : 佐藤 健 東北地域における地震及び各種災害が発生した際の調査、広報に関わる連絡や調整および関連事業の企画立案と支援 津波に強い建築を活用した津波減災研究委員会 (期限付) : 田中礼治	
支部研究補助費による研究	研究題目: 郊外住宅地の新陳代謝に関する実態調査 研究部会: 地方計画部会 (研究代表者 小地沢将之)	2023 年 4 月～2024 年 3 月
支部研究報告会	2023 年度第 86 回東北支部研究報告会 研究報告集第 86 号計画系・構造系刊行 発表題目 62 題 2023 年度第 9 回東北支部建築デザイン発表会 発表題目 4 題	2023 年 6 月 25 日 オンライン (Zoom)
支部主催 支部共催 イベント	1. 支部主催 1) 建築文化週間事業 2) 第 33 回「東北建築作品発表会」の開催 3) 第 44 回「東北建築賞」の選考 4) みちのくの風 2023 青森 ・支部研究報告会 ・建築デザイン発表会 ・招待講演 (構造系) ・招待講演 (計画系) ・オンライン見学会	2023 年 10 月 2023 年 10 月 2023 年 10 月～2024 年 1 月 2023 年 6 月 24 日・25 日 オンライン (Zoom)

	2. 支部共催 親と子の建築講座・建築文化週間事業	2023年7月～2024年2月
	3. 男女共同参画事業	2023年4月～2024年3月
研究部会主催	1. シンポジウム 2. その他、部会ごとに講習会・研究会・見学会などを適宜開催	
表彰	1. 日本建築学会設計競技部入選者の紹介 2. 日本建築学会東北支部功労者表彰 3. 終身正会員の紹介	2023年5月13日 オンライン (Zoom)
支所活動	青森支所 ・幹事会 秋田支所 ・第52回秋田県工業系高校生による建築設計作品コンクール 岩手支所 ・第46回盛岡市都市景観シンポジウム後援 山形支所 ・学協会ワークショップ 福島支所 ・親と子の都市と建築講座：福島市 ・後援事業	2023年6月 2024年2月 2023年11月 2024年1月 2023年8月
刊行活動	支部年報第43号発刊 東北支部研究報告集第86号計画系・構造系（第9回東北支部建築デザイン発表会込）CD-ROM発刊 東北建築作品集（第33号）発行	2023年5月13日 2023年6月25日 2023年10月7日

〈支部共通事業〉

講習会	建築基礎構造設計例集講習会	2024年2月7日 ハーネル仙台
展示会	全国大学・高専卒業設計展示会 山形市、郡山市、八戸市、仙台市で開催	2023年6月～11月
審査会	・2023年度支部共通事業日本建築学会設計競技課題「環境と建築」 ・日本建築学会「作品選集2024」東北支部選考部会	2023年7月 オンライン (Zoom) 2023年6月～9月 支部会議室、オンライン (Zoom)

法人・賛助会員

(株)阿部重組	(株)昴設計
阿部建設(株)	(株)本間利雄設計事務所+ 地域環境計画研究室
(株)関・空間設計	
鹿島建設(株)	(株)東北開発コンサルタント
(株)久米設計	東日本旅客鉄道(株)
(株)熊谷組	(株)I N A新建築研究所
清水建設(株)	(株)ティ・アール建築アトリエ
仙建工業(株)	日本原燃(株)
大成建設(株)	(株)楠山設計
(株)竹中工務店	クレハ錦建設(株)
戸田建設(株)	(株)工藤組
(株)ユアテック	仙台コンクリート試験センター(株)
西松建設(株)	東双不動産管理(株)
(株)安藤・間	アイジー工業(株)
堀江工業(株)	東北電力(株)
(株)ピーエス三菱東北支店	日本大学図書館工学部分館
(株)三菱地所設計	八戸工業大学
(株)山下設計	一般社団法人
(株)梓設計	東北空気調和衛生工事業協会
東日本興業(株)	東北芸術工科大学
	山形県立図書館

一般社団法人 日本建築学会東北支部

支部年報第 43 号
2023 年 5 月 13 日発行

編集責任者（図書情報担当常議員） 安部 信行
